
弟が訪ねてきたけど私は居留守を使いたい

枷月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟が訪ねてきたけど私は居留守を使いたい

【Zコード】

Z9316R

【作者名】

枷月

【あらすじ】

通称不幸の手紙、別名王様の書状により呪いを掛けられたお姫様の呪いを解くために城に出向いた解呪士のセリアが弟子志望で素性不明なアレンと家に帰つてから一週間。セリアの家にはまた厄介な訪問者が訪れていた。それは、かつてセリアが出て来た実家から彼女を追ってきた弟で……。

(前書き)

先に短編『お姫様は呪われてるらしいけど私は早く家に帰りたい』を読むことをオススメします。より楽しめます。若干残酷な描写があります。

『姉さん姉さん姉さん！ 今日この門を開けてよ姉さんー。』

ドン、ドン、ドンと規則的に叩かれる扉。

普通ならここで外聞を気にして開けるんでしょうね、普通、なら。

「セリア様」

生憎ここは森の中。

誰がどんなに叫ぼうが問題ない。

「開けなくていいわ、私には何も聞こえない聞こえない
……」

私がそう言つとアレンは扉と私を交互に見てから何も言わずに椅子に座り直した。

それを見てまた食事を再開する。

今は、食事に集中したかった。

『……姉さん、やっぱりそいつに脅されてるの？ 開けたら殺すつて言われてるんだ……だから開けられない、でしょ？ 大丈夫、僕は姉さんなら死体でも愛せるから安心して開けて？』

安心出来るわけない。

内心そう思いながらも知らないフリを続ける。

「セリア様、私はセリア様なら例え骨でも愛せます」

朝食の鳥の唐揚げの骨を恍惚とした表情で皿の上に乗せるアレンに背筋がぞくりとした。

「アレン、対抗しなくていいのよ？」

「どうか怖いわ。

死体だと骨だと、食事中の会話じゃないでしょ？絶対に。

「本心、ですか……？」

この前 私が解呪士として城に行きアレンが迎えに来た日から、何だかよくわからないけれどアレンの雰囲気が変わった気がする。まあ、こう毎日毎日続けばピリピリもするわよね。
無理矢理納得して、扉に視線を送る。

『やつと見付けたのに、どうして返事もしてくれないの？ 家から出て行つた姉さんを捜していくつもの国を蹂躪してきたのに。色んなお土産があるよ、だから開けて？』

その『家』が嫌で、『お土産』が扉を開けたくない主な理由などと察して欲しい。

……察してたら私を捜したりしないだろ？けれど。

『クーレヘン王国にしか生えない毒草に、アバルカス帝国でしか咲かない毒花、リリティア共和国にしかいない毒蝶の翅だよ！』

弟 ユアンは呪術士や解呪士……まとめて叫うといふの『魔法

使い『の才能がこれっぽっちもなかつた代わりに、様々な種類の毒や毒や薬の類いを、まるで呪術士が呪いをかけるように操ることが出来る才能を持っていた。

「わざわざ遠くの国を選んだのに……どうやって見付けたのかしら」

「セリア様、ちょっと掃除しに行つきますね」

「え？ 駄目よ。これ以上家のものを壊されたら……ねえ、アレン、掃除にフォークは必要ないでしょ？」

ピタリと動きを止めたアレンに、私は『掃除』の意味を勘違いしていたのだと悟った。

「必要です。抉つたり突いたりするのに重宝します……敵の眼球を」

有無を言わせないような笑みにズキッと身体に痛みが走った。
胸がときめいたのか胃が痛くなつたのか。

恐らく後者だ。

確かにアレンは害虫だとか害獣を一撃で仕留めることに関しては並外れていた。

けれど私は、いくら煩わしいとはいえ弟を始末して欲しいなどというまで人でなじじやない。

「落ち着いてアレン。扉の前にいるのは敵じゃなくて私の弟なのよ？」

「セリア様を煩わせるものはすべて敵です」

『姉さん姉さん姉さん姉さん開けてよ姉さん』

そもそも開けないと、無理矢理扉を破つて入つてくるかもしけない。

食事を続ける気はとつくなくなつていた。

無視し続けて帰つてくれるならそれが一番（面倒じゃない）と思つたんだけど……。

「コアン」

『な、に、姉さんー。』

返事が貰えたことに喜ぶコアンの声に、嫌だつたとはいえ懐かしいものを感じて顔が綻ぶ。

それを見たアレンは田を見開いてフォークを握り締めていたけど。

「約束して。お土産は私の前に出さないと」

『でも』

「後、アレンは私の弟子だから毒を盛らないこと」

『……わかった。お土産は今度にする』

小さく溜め息を吐いて立ち上がる。

コアンが答えたのはお土産に関することだけだったけど、万が一毒を盛られてもアレンならばそつ簡単には死はないだろ？

「アレン、扉から離れていて」

「……はい」

泣々ながらも扉から一番遠い場所まで移動したアレンを見届けてから扉に掛かっていた鍵を開ける。

と、同時に物凄い勢いで扉が引かれた。

「姉さんっ！」

黒髪に濃い青の瞳。

私と同じ色彩を持ち同じ血をわけた弟。

最後に顔を合わせた……三年前はまだ私よりも背が低かったのに、今では私よりも頭一つ分高い。

「ユアン……何するの」

ガバッと抱き着いてきたことはまだ許容範囲。
だけど額から始まり頬に、鼻先に、口付けを落とすのはどうかと思う。

そう思つたのに、ユアンは小さく首を傾げた。

「挨拶だよ　っと、危ないなあ」

私とユアンの間を通つて何かが横切つた。
トスツと音を立てて壁に刺さつたのは、銀色の　フォーケ。

「セリア様から離れてください」

「お前が姉さんをたぶらかした　フフ、家に帰つたら？　ただの弟子の分際で家族の感動の再会を邪魔しないでよ」

ピリピリとした空気が漂う。

この二人は私の冒を破壊したいの？

「……ユアン、大人しく出来ないなら追い出すわよ」

「姉さんは僕よりあの男を選ぶの？　あんなの、ただの家出王子なのに！」

「……王子？」

王子、アレンが、王子。

思い返してみれば、そつなんぢやないかと思つたこともあった。

銀髪で、家事が壊滅的で、美形だったりもして。

「『弟』というのは、いつもいつも私の邪魔ばかりする生き物なんですね」

「第一王子アレンワード＝ハイン＝リベンダルともあれつ人間がこんなところで何してるわけ？ 姉さんはあげないから」

「セリア様は物じやないんですよ？」

「弟子とか言つてるけど『面倒だからまあいつか』とか姉さんに思わせて何となくいるだけのくせに」

「逃げられた姉の痕跡を追つて、その姉がいた国を蹂躪して玩具にするような人でなしには言われたくありませんよ」

「姉さんと一緒に寝たことないくせに」

「セリア様の手料理を食べたことはあるんですか？」

「「く……っ」」

若干意識が飛びかけた。何なのこれは。

私を挟んだまま、二人は不敵な笑みを浮かべて言い争つた。

その内容は段々と幼稚なものに変わつていった。

最後には、『ぱーかばーか』『馬鹿つて言つほうが馬鹿なんですよこのシスコン』になつた。

……心配して損したわ。

アレンとコアンは、舌戦ではなく肉弾戦をし始めるんじゃないかと思つていた。

アレンが王子だという件については『知らなかつた』ことにしようと心に決める。

私は、何だかんだでここでの生活を氣に入つていた。

「コアン、取り敢えず座つたらどうかしら。アレンも」

コアンと、アレンと、言い争つ様子を見ているとまるで兄弟喧嘩でもしてこるように見える。

久し振りに自分が姉であることを実感して、知らぬ間に笑みを溢していた私を襲う更なる『弟』の襲来を、私はまだ知らなかつた。そしてそれは、また別の話。

「兄上……いい加減戻ってきて下さらないと父上の髪が……」

(後書き)

アレンの素性が暴露されましたが、セリアは知らないフリをする
そうです。何故なら今さら王子様扱いに切り替えるのが面倒だから
です。ちなみに二人目の弟とは例の……。

ユアンはあれでも姉としてセリアを好いています。

アレンは弟子 傍にいると安心する 恋人 離れると落ち着かない
セリアの感情をコントロールしようとしていましたが、ユアン
の乱入で見事恋愛すつとばして家族ポジションに。セリアだけは、
ほのぼのします。頭上をナイフやフォークが飛び、たまにアレンの
飲み物にだけ毒物が混入しますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9316r/>

弟が訪ねてきたけど私は居留守を使いたい

2011年5月27日15時26分発行